

毎月の収入が約七十円くらいあり、母や姉も働く、農業もありで一家の生活はまあまあということでした。姉たちもそれぞれ良縁を得て嫁いでおりました。

復員後の私の生活は故紙（製紙原料）の買い付けです。三番目の姉の夫が製紙会社を設立し、私に原料買い付けを任せられました。大阪、九州へ出向いて六〇キロ程度に梱包された故紙を船を雇って伊予三島へ回送する。会社の従業員ではなくて、私個人の仕事でした。業績も順調に進んで安定した生活をしました。

昭和二十六年、従姉妹の娘と結婚し、三児に恵まれています。妻は私の母の妹の娘でイトコ同志です。孫は内外合わせて七人になり最長は二十三歳、最少は中一で全員元気です。

長男は松柏農協の総務部長を勤め、毎夜帰宅は八時過ぎ。嫁は近所の幼稚園の保母で永年勤務帰宅はおそい。内孫三人は夕方になると「腹へった、腹へった」と訴える。妻の炊事当番で母親に代って食事をさせる。祖父母の任務は家の留守番、買出し、炊事、エトセトラで二人協力して元気に暮らしている。

長男夫婦は夏冬のボーナスを貰うと、二人で出し合つて祖父母に年二回のボーナスをくれる。ところがそれくらいではお正月になると、大赤字になる。毎年正月は三人の子供夫婦と七人の孫たちが我が家に集合する。食べて、飲んで、歌つて、お年玉をやる。歌が上手にできるとまたおひねりを出す。十年続いている。毎年「大赤字だ、大赤字だ」と言いながら心の中では老後を楽しんでいる。

轟沈空母生き残り

海軍生活満四年間

高根県 本田 茂

父・常助は建築業。大正十年三月三日、島根県簸川郡斐川町一、二六六で長男として生まれました。したがって家業を継ぐため大工として修業していました。

昭和十六年徴集、兵隊検査では第一乙種合格、十七年一月に現役兵として呉海軍兵学校へ入団しました。家

には、弟春夫（十九年十月比島方面で戦死）、妹二人、弟鉄郎、父は健在で建築業を続けていました。

入団は海軍工作兵とし四等水兵でした。海軍の訓練は厳しいことと覚悟していましたが、初年兵のときはえらかった。苦しみました。毎日のように精神緊張棒というバットで尻を叩かれる。自分はなんぼ良くても、戦友との連帯責任だから毎日叩かれるのです。

このような行為は次々へと申し送りするのですが、古兵の人間性によることもあったでしょう。四等水兵のときは基本教育で、それが終わったら横須賀工作学校で六カ月教育を受ける。それが終わると各部隊や船舶へ配属されるのです。それまでは同年兵だけだからいいが、卒業してからが大変でした。

昭和十七年十一月三十日、工作兵として佐伯海軍航空隊に入隊、昭和十八年十二月まで在隊しました。その間は工作兵としての実務につくが、職業的なことをやる。木工とか、金工とか、自分の専門のことをやるのです。船の補修や、飛行機の翼の補修をやらされる。エンジンは整備兵の仕事ですが、工作兵といっても全

然の素人が多い。金槌を持ったこともなく、鋸も使えない、ですから鋸の目立てもやれない。しかし、私は大工ですから、技術上は下士官より上であるのでその点では楽でした。

佐伯での教育で特殊な、重要なことは潜水服を着て潜る訓練でした。海へ墜落した航空機や、船底の検査をする。これが工作科の主な仕事、海の底の仕事が多かったのです。海中を三〇メートル潜ると視界が分からなくなる。五〇メートルになると全然分からない。空気はポンプで上から送る。電話が付いていて水上、水中で話をして海底状況などを報告します。

潜水病にかからぬため、三〇メートル上がるのに一挙には上がらない。途中三回ぐらい休む。二、三分間の休みの間に空気を調整する。一気に上がると潜水病になってしまいます。空気の調整とは、潜水服の中の気圧（服の頭部に空気を溜めてある）を調整するのです。また、我々が潜水するときは医務室で検査をし、体の悪い者、健康上不調の者は潜らせないので、潜水病にはなりませんでした。

昭和十八年十二月十六日、航空母艦「雲鷹」(大阪商船の船を改造した二万トン以上)の乗組を命ぜられました。この空母は海上護衛、船団護衛が主任務で、海上護衛総司令部の隷属となりました。

昭和十九年一月四日から二月八日まで、サイパン島へ航行、その間は「戦務甲」でした。帰る途中、連合軍の魚雷を食らい、沈没は免れ曳航され横須賀に帰港し修理をしました。その時第一回の命拾いをしたわけです。

八月十五日、「雲鷹」は第一海上護衛隊に編入されました。八月二十三日、馬來、シンガポールから戻るとき、九月十六日か十七日ころでしたか、台湾沖で魚雷を食らい轟沈しました。私は工作兵だったので木材を持って上甲板に出ていました。艦は十分ぐらいで沈没してしまいましたが、艦長は総員を上甲板に整列させ、軍艦旗に敬礼させ艦とともに運命を共にして戦死されました。

艦が沈没するとき、私たちは甲板を滑り落ちて行きました。繩梯子で降りようとしていた人々はほとんど

死んでしまいました。最後まで上甲板にいた人々が助かった。沈むとき、艦に巻き込まれて水中に沈んでいきました。三分の二の人たちが死んだのです。

私は木材を持っていたし、筏に付いていて浮いていたので助かった。浮かんでいる人たちを、駆逐艦などの小さい艦艇が助けに来る。何人か固まっていれば発見される。自分の筏には十人ぐらいいて比較的早く救助されたが、一人や二人で波間に漂っているとなかなか見付からない。小さな艇は「雲鷹」の沈んだ跡を、ぐるぐる捜していた。しかし、海上には重油が浮いている。私も重油をかぶり目が真っ赤になってしまい、大部分の人は目をやられました。救助には半日ぐらいかかりました。

私たちを助けてくれた海防艇は台湾の高雄港へ着きました。約九カ月の間に、二度魚雷攻撃を受け、運良く生きて帰れた者は三分の一ぐらいでしょうか。艦船に乗り組んだ海軍の軍人は、いつの日か、どこかで海没の運命を担っていなければなりません。高雄奇港の一週間は健康診断が多かったのですが、艦には各

兵科があり、各分隊に分かれているので、何人死んだか、だれが死んだか分かりません。

高雄港から商船で門司に無事着いたのは十月七日でした。昭和十九年十月十六日、呉海兵団に仮入団し、十一月一日二等工作兵曹に任官しました。二月八日、海防艦「波太」の機装員を命ぜられ、造船所で完成まで勤務。四月七日「波太」の乗組員を命ぜられ、警備海防艦として日本海の警戒を主任務としていましたが、その間、連合軍航空機からの空襲や、港湾や海峡などに敷設機雷投下が続けられ、日本の内海のような日本海にも、潜水艦さえ出没するようになったのです。

五月五日、対潜隊となり、第五十一戦隊に改編され、六月十日、第一〇二戦隊編入、その後日本海勤務で戦務甲となっています。当時、日本の艦船はほとんど壊滅し、無敵を誇った「大日本帝国連合艦隊」も名ばかりの存在となり、沖縄戦も終わりを告げていた。ということを戦後知りました。

六月中旬から七月下旬まで、舞鶴工廠勤務となりましたのは、乗り組む艦艇もなくなったのか、工作兵で

あったためだったのでしょうか。七月五日、南方方面護衛部隊（第二海防隊）勤務となり、七月二十九日から終戦後の八月二十四日まで、日本海上に勤務し、対空・対潜など勤務甲として最後の御奉公をしていました。ですから、終戦は朝鮮で聞いたのです。帝国海軍としての誇りを持っていた我々でしたが、終戦のショックは大きかったです。

戦後の任務も、「戦務甲」となっているのは、当時、日本の周囲の海域には連合軍の敷設機雷が多く、戦中と変わりない危険な航行でした。終戦後の任務は朝鮮在任の日本人の送還や、軍人復員のための輸送でした。空からの攻撃や、潜水艦の雷撃、艦砲射撃はなかったけれど、敷設機雷が無数にあるので、運航には神経を使っていました。我々工作科は上甲板で見張りが主勤務です。海防艦の艦長は商船学校出身の少佐で、下士官も船員出身の人が多かった。戦闘を主任務とする艦とは、艦内の空気も違ったものでした。

昭和二十年十一月一日、予備役一等工作兵となり復員は十二月でした。復員し故郷に帰ったのですが、私

の後で入営した弟の春夫は昭和十九年一月、広島島の船舶砲兵隊に入隊、同年十月、比島方面において戦死との公報がきましたが、船舶隊でしたからもちろん、遺骨も帰ってきませんでした。父は建設業をやっていたが、戦後のことで仕事もなく、私は出雲市の工務店に入社し三十三年間勤め、現在は退職しています。

思えば工作兵であったので、「雲鷹」轟沈のとき、材木を持って上甲板にいたので助かった。海に漂流中役に付いていたので早く救助された。戦争末期には日本海付近にいたし、復員業務たる輸送任務に数ヶ月間ついていたが、敷設水雷に接触もせず帰還者を無事内地へ送り届けることができました。

満四年間の海軍生活、南洋、馬來、台湾と航海勤務をし、多くの戦友を失っているにもかかわらず、復員の会社勤務を終え、元気で生活できたことは幸せであり、亡き戦没者の御冥福を祈っております。

海上護衛駆逐艦勤務 奇跡的な生還

山形県 菊地 清一

昭和十九年の夏の盛り、大東亜戦争も終わりに近いころです。半ば強制的に軍人志願を強いられて、私も海軍志願検査に合格、年齢は十八歳でした。私は機関兵として、同僚十一人は水兵科として舞鶴海兵団に入団しました。親元を離れ、お国のためとはいいながら、旅立つ我が子に親も辛い思いで送り出してくれたと思います。

入団一週間前のこと、秋の取り入れもぼつぼつ始めていたが、村役場の兵事係の方が、「採用通知書」を持ってきて「おめでとう」と言われる。まさかと思いましたが、やっぱり来た来た。隣のK君にも来た。上のだれにも来たと、兵事係の方が、さも嬉しそうにし